

種生物学会 ニュースレター No. 34

THE SOCIETY FOR THE SYUDY OF SPECIES BIOLOGY NEWSLETTER

URL <http://sssb.ac.affrc.go.jp/>

May 2007

目次

新・学会長あいさつ	1
新役員・新事務局住所	2
種生物学会片岡奨励賞の募集	3
「片岡賞」設立の経緯について	河野昭一 3
第38回種生物学シンポジウムの記録	4
第38回種生物シンポ参加報告	安元暁子 6
『日本のクモ』, ナチュラルヒストリー	土松隆志 7
種生物学シンポジウム体験記	岡本朋子 7
第1回種生物学会ポスター賞の決定	8
会長・副会長・地区幹事選挙の結果	8
総会の記録	9
庶務報告	10
会計報告	10
英文誌編集委員会報告	10
和文誌編集委員会報告	11
2006年決算・2007年予算	12
種生物学会会則	13
Plant Species Biology 21 (3) 和文要旨	15
自然史学会連合総会記録	18
日本分類学会連合総会記録	19
会費納入のお願い	21
会員異動	21

新・学会長あいさつ

可知 直毅 (首都大学東京)

2007年1月から、角野康郎副会長、木下栄一郎庶務、西谷里美会計、藤井伸二渉外担当委員とともに学会の運営にあたることになりました。種生物学会がなにをめぐしどんな活動をしているか会員のみなさんにとってわかりやすい、これまで以上に透明性の高い執行部にしたいと考えています。

種生物学会は、植物実験分類学シンポジウム準備会として発足し、1968年に「生物科学第1回春の学校」を開催したのが活動の出発点です。そして、1980年に「種生物学会」が発足しました。2006年末で38回を数える合宿形式の「種生物学シンポジウム」は、会誌発行とならび学会員のみなさんが直接参加するもっとも重要かつ特色ある学会活動です。このシンポジウムがどのようなものかは

ご存じの会員が多いと思いますが、まだ参加の機会がない方はぜひだまされたと思って一度参加してみてください。次回は2007年12月に神戸大学の伊藤一幸さんのお世話により、六甲山方面で開催予定です。

2006年末の総会で、学会としての新たな活動として、「種生物学会片岡奨励賞」、「Plant Species Biology 論文賞」、「種生物学会ポスター賞」という3つの学会賞を設置することが決まりました。各賞はそれぞれ性格が異なりますが、会員のみなさんが学会の活動にかかわる機会を増やそうという意図は共通しています。「学会賞」というと、とかく堅いイメージでとらえられがちですが、種生物学会の賞は会員がより身近に感じる賞をめざ

しています。会員のみなさんの積極的な参加を期待しています。

植物実験植物分類学シンポジウムの記録集として発行されていた和文誌「種生物学研究」は、22号（2000年）から単行本化され2007年3月に30号が発行されました。単行本化した和文誌は、学会の外の多くの読者にも受け入れられ、種生物学会がカバーする研究分野の裾野を広げその発展に寄与しているだけでなく、経済的にも学会に貢献しています。2007年1月からは神戸大学の工藤洋新編集委員長を中心に続巻の編集作業がすすめられています。また、国際的に通用する学術誌をめざして1986年に英文誌「Plant Species Biology」を創刊しました。ISIのScience Citation Index（いわゆるインパクトファクター）の登録が実現し、電子投稿システムも導入されるなど、大原新編集委員長を中心に国際誌としての地位を固める

ための努力が着々と進められています。PSBは他の近隣の分野の雑誌がカバーしきれない種生物学会ならではの内容の論文も掲載しています。学会誌を支えるのは、結局は会員の皆さんの積極的な投稿です。どうぞよろしくお願いします。

現在の会員数は、一般会員・学生会員あわせて約400名です、この会員数は会員のみなさんがそれぞれの研究の発展に即して新たな研究交流の輪をひろげていくのに適した規模だと思います。いうまでもなく、学会は学会のためにあるのではなく、会員のみなさんが「種生物学会にはいってよかった」と思っていたくためにあります。そのためには我々執行部や英文誌・和文誌編集委員会、地区幹事の努力に加え、会員のみなさんの学会活動に対する積極的な寄与が不可欠です。これから3年間どうぞよろしくお願いします。

2007～2009年の新役員

会長 可知直毅

副会長 角野康郎

庶務 木下栄一郎

会計 西谷里美

渉外担当委員 藤井伸二

ホームページ担当委員 芝池博幸

会計監査 渡邊幹男

石濱史子

地区幹事 高田壮則

黒沢高秀

横山 潤

芝池博幸

綿野泰行

地区幹事（続き）

石濱史子

藤井伸二

増田理子

加藤 真

湯本貴和

田村 実

國井秀伸

吉野由紀夫

西脇亜也

英文誌編集委員長 大原 雅

和文誌編集委員長 工藤 洋

学会賞選考委員長 角野康郎

新事務局の住所と会費納付先

庶務：

●〒920-1164 金沢市角間 金沢大学 応用生物計測研究センター附属植物園 木下栄一郎

tennansh@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

会計：

〒211-0063 川崎市中原区小杉町2-297-2

日本医科大学・新丸子校舎・生物 西谷里美

satomi-n@nms.ac.jp

会費納付先

郵便振替口座番号 00240-6-45544

加入者名 種生物学会

会費：一般会員 12,000円、学生会員 6,000円

第1回種生物学会片岡奨励賞の募集

種生物学会片岡奨励賞の候補者を募集します。会員の皆様の積極的な自薦または他薦を期待します。授賞者の決定は選考委員会で行われ、2007年度総会において賞状と副賞20万円が授与されます。

資格：2007年度総会の時点で本会の会員歴が1年以上であり、2007年12月1日において満40歳以下であること。

応募方法：以下の書類を選考委員長宛に送付してください。なお推薦は2年間有効です。

他薦の場合（推薦者は会員に限る）

- (1) 候補者の氏名と連絡先
- (2) 推薦理由書（A4用紙に1枚程度）
- (3) 被推薦者の業績リスト（様式は自由。業績リストの作成が困難な場合は、選考委員会が候補者に提出を依頼しますので不要）。

自薦の場合

- (1) 略歴と連絡先
- (2) 自薦の理由書（A4用紙に1枚程度）、
- (3) 業績リストと代表的な業績の別刷またはコピー各1部
- (4) 種生物学会への貢献（学会誌への論文掲載、

シンポジウムの企画・講演、役職歴、等）。

応募書類の提出期限：2007年8月31日

応募書類の送付先：

657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学理学研究科生物学専攻

角野 康郎 宛

電子メールでの応募も受け付けます。

kadono@kobe-u.ac.jp まで必要書類を添付書類としてお送り下さい

通知：10月末までに受賞者本人宛に授賞通知をします。

備考：受賞者は12月総会での授賞式にご出席頂くとともに、*Plant Species Biology* 誌に invited article の執筆をお願いします（内容等については編集委員会と相談して頂きます）

故片岡政之氏を記念する「片岡賞」設立の経緯について

河野昭一（種生物学会会員、初代会長）

種生物学会会員、片岡政之氏（当時、農水省九州農試に勤務）は、不慮の交通事故のため、平成3年4月27日に逝去されました。故人は草地の牧草や雑草として生育するイネ科植物の適応戦略の分化に関する研究に鋭意取り組み、メヒシバ集團の生態型分化に関する研究に、精力的に取り組んでおられました。鳥羽市における第21回種生物学シンポジウムでは、研究成果に関して貴重な成果を紹介・講演され、参加者一同に大きな感動を与え、将来を嘱望されていた新進気鋭の研究者でありました。その成果の一部は、*Journal of Applied Ecology* 誌（1991）*に掲載されました。

故片岡政之氏のご両親は、ご本人が果たせなかった夢を、若手の研究者に托したいと考えられ、当時、種生物学会を代表していた私、河野昭一に、1千万円という多額の寄付金を托されました。当

時、学会幹事会において慎重審議を行い、故片岡政之氏を記念する「片岡奨励賞」を設立し、末永く彼の功績と片岡家の暖かいご意志を学会の歴史に残そうという総意をもって、今日まで大切に基礎基金「1千万円」は取り崩すことなく預金し、維持をして参りました。ただし、平成14年、15年には、当時の執行部の判断で、学会の財政が逼迫し折に、それまでの積み立て利子分（477,688円）のみを一般会計の赤字補填に運用いたしました。勿論、この措置は、幹事会、総会の議を経て、その総意をもっての決定であります。

*Kataoka, M., Ibaraki, K., Tokunaga, H. (1991) Population regulation of Rhodesgrass cultivars in sward conditions. II. Tiller density. *Journal of Applied Ecology* 28 (3), 842-854

第38回種生物学シンポジウムの記録

2006年12月1～3日，奥琵琶湖マキノパークホテル&セミナーハウスにて開催。参加者：116名

プレシンポジウム：レッドデータプランツのその後

永田 芳男（植物写真家）

シンポジウム1：生物間相互作用が介在した種分化と多様化

オーガナイザー：川北 篤・奥山 雄大（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

1. 同所的な種間での送粉者置換と交雑が促したチャルメルソウ属の多様化
奥山 雄大（京都大学大学院 人間・環境学研究科）
2. 北米産野生ヒマワリにおける雑種形成と種分化
谷田辺 洋子（国立科学博物館）
3. コミカンソウ科 - ハナホソガ属間の絶対送粉共生系における共進化と共多様化
川北 篤（京都大学大学院 人間・環境学研究科）
4. 東南アジア熱帯雨林における植物-アリー-カイガラムシ3者共生系の分子系統解析
上田 昇平（信州大学大学院理学研究科）
5. 共生宿主との関係から探るオニイグチ類の多様化
佐藤 博俊（京都大学大学院 理学研究科）
6. スズメダイとの栽培共生が介在したイトグサ類の種分化
畑 啓生（京都大学大学院理学研究科）
7. マルカメムシ類と腸内共生細菌の相互作用と寄主植物利用に関する多様化
細川 貴弘（東京大学大学院総合文化研究科）

シンポジウム2：移入・移動の現状と課題にともなう諸問題

オーガナイザー：伊藤元己（東大・院・総合文化），西脇亜也（宮崎大・農），小林達明（千葉大・園芸）

第一部 移入・外来種の現状と課題

1. 外来植物の侵入・定着 - 種生物学の課題
角野 康郎（神戸大）
2. 移入・外来種対策の課題
村中 孝司（東京大学・院・農学生命）
3. 外来種のリスク管理
黒川 俊二（畜産草地研究所）
4. 緑化用種苗の諸問題
小林 達明（千葉大）

第二部 移入種の進化研究

1. ギンギシ属における外来種と絶滅危惧種の種間交雑
野村 尚史（総合地球環境学研究所）
2. 水生シダ植物オオアカウキクサ類での在来種と外来種の現状
鈴木 武（人と自然の博物館）
3. ペット昆虫としてのクワガタムシ・カブトムシ類における移入種問題
細谷 忠嗣（京大・理）・荒谷 邦雄（九州大・比文）
4. 雑種形成によるタンポポ属植物の種分化-多様なクローンとその生理生態的特性の分化-
保谷 彰彦（農業環境技術研究所）

ポスター発表の記録

- P-1 シロイヌナズナ (*Arabidopsis thaliana*) における非中立な多型を持つ遺伝子のゲノムワイドな探索 永野 惇・西村いくこ (京大院・理)
- P-2 ブナ植林による遺伝子攪乱の可能性とホームサイドアドバンテージの検証 菅野 学・陶山 佳久 (東北大院・農)
- P-3 分断林におけるミヤコザサの分布拡大と林床草本の種多様性 富松 裕 (首都大・理工)・山岸洋貴 (北大・地球環境)・近藤錬三・佐藤雅俊・田中一平・紺野康夫 (帯広畜産大・畜産科学)
- P-4 絶滅危惧コウホネ属植物の遺伝的多様性と遺伝構造 - 西条盆地に成育する3分類群の比較研究- 上川 愛 (広島大院・国際協力)・井鷲裕司 (京大院・農)
- P-5 民家庭園におけるエビネ属植物の葉緑体 DNASSR 多型 中嶋隆史・道下雄大・山根京子・山口裕文 (大阪府大院・生命環境)
- P-6 交雑起源種トウカイコモウセンゴケ (*Drosera tokaiensis*) は両親種からの生態的地位の分化に寄与した超越形質を持つか? 市橋泰範・服部健太・品川修二・愛知真木子・南 基泰 (中部大院・応用生物)
- P-7 琵琶湖におけるタチスズシロソウの現況 山口正樹 (神戸大・理)・杉阪次郎 (神戸大・自然科学)・工藤 洋 (神戸大・理)
- P-8 キスゲとハマカンゾウ間における花粉と花柱の相互作用-生殖隔離研究の観点から- 安元暁子・新田 梢・矢原徹一 (九大・理)
- P-9 タデスミレ (*Viola thibaudieri*) の個体群構造および生育環境 尾関雅章・大塚孝一 (長野県環境保全研究所)
- P-10 昼咲き種と夜咲き種の雑種 F2 世代における開花パターン 新田 梢・安元暁子・矢原徹一 (九大・理)
- P-11 クローナル植物スズランの繁殖動態- 追跡調査と掘り取り調査から明らかになったこと- 荒木希和子 (北大院・環境科学)・島谷健一郎 (統計数理研究所)・大原 雅 (北大院・環境科学)
- P-12 ツユクサ属植物における性配分変異は種子発芽動態の違いによるのか? : 理論と実証 土松隆志 (東大・広域システム)・酒井聡樹 (東北大・生命科学)・渡邊幹男 (愛知教育大・生物)・伊藤元己 (東大・広域システム)
- P-13 コバノミツバツツジにおける葯ごとに異なる花粉粒数 長東 学・川窪伸光・鏡味孝介・見塩昌子 (岐阜大院・農)
- P-14 葯内花粉粒の精密計数法 川窪伸光・長東 学 (岐阜大院・農)
- P-15 花の香りが支える種特異性- カンコノキ属と *Epicephala* 属絶対送粉共生系において- 岡本朋子・川北 篤・加藤 真 (京大院・人環)
- P-16 ブナカイガラタマバエのゴール多型と遺伝的分化 三島美佐子 (九大総博)・佐藤信輔 (九大院・農)・湯川淳一 (九大総博/九大院・農)
- P-17 アリによる植物の直接的・間接的利用-森林ギャップの効果- 半田千尋・市岡孝朗 (京大院・人環)
- P-18 カビた葉はご馳走? - 揺籃に *Penicillium* を植えるハギルリオトシブミとその菌の役割- 小林知里・加藤 真 (京大院・人環)・深澤 遊 (京大院・農)・広瀬 大 (筑波大・菅平高実セ)
- P-19 ホストはダニの分化に介在するか? 日本産クマバチ属に便乗するコナダニの系統地理学的研究 川添和英・川北 篤・加藤 真 (京大院・人環)
- P-20 オキナワヤマタカマイマイの隠蔽種の存在とその間にみられる生殖的形質置換 亀田勇一・加藤真 (京大院・人環)

第 38 回種生物シンポ参加報告

安元暁子 (九州大・理・生物)

私は今回 8 年ぶりに種生物学会のシンポジウムへ参加しました。8 年前の鹿児島大会は当時 4 年生であった私が初めて参加した学会でした。この大会で「森の分子生物学」と「送粉生物学-最近の動向-」のシンポジウムに感銘を受け、「私も研究者になりたい」と感じたことは今も記憶に新しいです。この鹿児島大会は例年の泊まり込み形式ではなくホテルと会場が分かれていたため、今回の滋賀大会が私にとって初めての種生物学会らしい大会でした。大会中は、様々な場面で様々な方々と活発に議論・雑談し、とても楽しく過ごさせていただきました。

二日目のシンポジウム 1「生物間相互作用が介在した種分化と多様化」は、どの話も斬新に興味深く、写真や動画も多くて、楽しい時間を過ごすことができました。中でも最も衝撃的だったのは、スズメダイの仲間が藻類を栽培していたことです。魚が藻を口に入れ藻園を離れてペッと吐き出すあの映像は、一生忘れられないだろうと思います。現象の面白さもさることながら、消化効率が悪い藻が除草されることなどもきっちり押さえてあって、謎解きの楽しさを味合わせて頂きました。次に興味深かったのはヒマワリの話です。近年 QTL マッピングの手法が普及し野生生物に適用されるようになるまで、小さな染色体構造変化(逆位・転座)の存在を押さえた上でその適応的意義を調べることは困難でした。そのため、小さな染色体構造変化(逆位・転座)が生殖隔離に寄与するかに注目されていた点に斬新さを感じました。カンコノキの話では、雄花で花粉を集めその後雌花へ訪花するという、ホソガのメスの行動がどうやって進化してきたのかに興味を湧きました。雄花と雌花で香りが微妙に違ってもうかがいましたし、今後の進展が楽しみです。チャルメルソウの話も、聞けば聞くほど、チャルメルソウの仲間が「送粉者への特殊化」と「交雑」が多様性を生み出すメカニズムを調べるのに適した材料であることが分かり、ぐいぐいと話に引き込まれました。アリ植物- アリー カイガラムシの三者系では、カイガラムシとの共生関係がそれほど厳密でないとのこと

に興味を持ちました。アリがカイガラムシをどのように運んでくるのが一番気になります。外生菌根菌オニグチ類の隠蔽種探索では、見た目が同じキノコでも宿主特異性とマッチした隠蔽種の可能性があることに、興味を湧きました。マルカメムシとその腸内細菌の話は、発表者と以前同じ研究室にいたこともあり、ある程度は知っていたのですが、何度聞いても面白い現象でした。

三日目のシンポジウム 2「移入・移動の現状と課題にともなう諸問題」は、侵入生物とその進化的影響についてでした。全体的に侵入生物とそれに近縁な在来種間で生じた相互作用や、その影響に対する行政その他の対応に話がしぼられており、群集レベルでの話は敢えて省いてある印象を受けました。このシンポではクワガタの話とオオアカウキクサの話が特に印象に残っています。クワガタの話は大変分かりやすく面白く、クワガタの外来種問題で消費者の低年齢化とインターネット売上の普及が大きな問題であることがダイレクトに伝わってきました。発表をうかがいながら、もし細谷さんが出演した「ペット昆虫を捨てたり逃がしちゃ駄目ですよ CM」が作成・放映されたら、消費者である子供たちに良い影響を与えるのではないかと想像したりしました。オオアカウキクサの系は、アイガモ農法協会とのやりとりが勉強になりました。どの外来(雑種)品種ならば、互いがどの点でなら妥協できるのかを詰めていく必要性は、今後社会的に増えていくと思います。

8 年前の種生物シンポに参加して研究者を志した私が、秋に博士号を取得したこのタイミングで、新設された種生物シンポのポスター賞を頂いたこと、大変嬉しく思いました。頂いたクモ図鑑は、写真が大変美しく、初日に買おうか買うまいか悩んでいた本でした。大切にしたいと思います。野外でも家でも、時々、気になるクモに出会います。彼らの名前をチェックするために、また、ふと気晴らしをしたくなった折々に図鑑を開くことでしよう。最後になりましたが、シンポを企画された方々、関係者の方々、そして、参加者の皆様、楽しいシンポジウムをありがとうございました。

『日本のクモ』、ナチュラルヒストリー

土松隆志（東大・広域システム）

今回の種生物シンポよりポスター賞が新設されることになったとのことで、その栄えある第1回のポスター賞をいただくことができました。加えてこのニューズレターに文章を書く機会もいただいで、関係者の方々に感謝するとともに、これを励みに研究にさらに邁進して行きたいと思っている次第です。

そのポスター賞の副賞として、文一総合出版から最近出版された『日本のクモ』という何ともマニアックな図鑑をいただきました。大変嬉しいことなのですが、実は私はクモはさっぱりわからず、せいぜい片手で数えられるくらいしか名前を挙げるできません。しかし、これもよい機会。これから野外で見慣れぬクモを見つけたら、この図鑑片手に同定してやろうなどと思っている次第です。植物採集の時に巣が引っかけたて煩わしいとぐらいにしか思っていなかったクモも、いつしかかわいくてしょうがない存在になり、気づけばクモの生態の研究をはじめているやも知れません。

さて、今回のシンポジウム「生物間相互作用が介在した種分化と多様化」のイントロにおいて、奥山雄大さん（京大）は、種分化・多様化研究のキーワードとして「実験生態学」「遺伝学」「系統学」と並べられた後、4つ目に「ナチュラルヒストリー」を挙げられました。実際、シンポジウムの演者の方々は、チャルメルソウ、ホソガ、スズメダイ、オニグチ、カイガラムシ、ヒマワリ、マルカメムシと材料こそ様々ですが、みな野外に出て、生物をよく観察し、不思議だと思うことを発見して、それを筋道立てて解決していく、というような姿勢で研究を進められているのだということがひしひしと伝わってきました。皆さん、まさに「ナチュラルヒストリー」を実践されていた

わけです。

生物学においては、いくつかの普遍的な理論や法則が知られています。一見、普遍則を求めることこそ生物学のすべてのように思えてしまいますが、そのような理論や法則も、実際の生物の観察なしには決して得られないものだったはず。奥山さんが種分化・多様化研究のキーワードとして「ナチュラルヒストリー」を強調されたのも、野外での生物の観察なしには生物学の新しい理論の発展もないだろうという強い思いからでしょう。そして実際演者の方々は、野外での生物の観察を通して、各々より一般性の高い理論や仮説の提示に迫っていたと思います。

しかし、何も生き物のことを知らない人がただやみくもに野外で観察を行っても、きっと実りある成果はなかなか得られないはず。そのような時に最初の道しるべになるのが、優れた図鑑の類だと思います。図鑑片手に生物を観察するようになり、しかしいつしか「図鑑を見ても見分けられない野外変異を見つけて、本格的に生物学に足を踏み入れた」という研究へのきっかけを挙げられる分類・系統学者を私は何人も知っています。そういう意味では、優れた図鑑は、ナチュラルヒストリーへの入り口であると言ってもよいのかもしれない。『日本のクモ』に載っている見たこともないようなクモたちに驚嘆しながらそんなことを考えつつ、私は滋賀県マキノから東京への帰途についていたのでした。

最後になりますが、シンポを企画されたオーガナイザーの川北さん・奥山さん、シンポ運営に携われた京大のみなさん、本当にご苦労様でした。そして、素晴らしいシンポを本当にありがとうございました。

種生物学シンポジウム体験記

岡本朋子（京大・人間・環境学研究所）

今回の種生物学シンポジウムでは急遽準備委員を務めさせていただくことになり、要旨集、名札

の作成や名簿管理、設営・受付等大変多くの経験をすることができました。さらに今回のシンポジ

ウムからはポスター賞が新設され、準備が不十分であったにも関わらず、貴重な第一回のポスター賞をいただくことができました。準備や運営では至らぬ点も多かったと思いますが、無事シンポジウムを終えることができたのは参加者の皆さまの協力あってのことだと思います。また、ポスター発表では多くの方々が説明下手な私の発表を根気強く聴いてくださり、さらに貴重な意見をたくさんいただきました。皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。準備委員、発表者としてシンポジウムに深く関わることができ、なおかつ「楽しく」参加できた学会はこれまでなかった為、私にとって大変思い出深い貴重な体験になりました。

プレシンポジウムでの永田芳男さん（植物写真家）の目眩くレッドデータプランツの世界には引き込まれずにはおれませんでした。そして「今まで嗅いだことのない、信じられないくらい良い香りがする」と表現された「チシマキンレイカ」は花の香りを研究している私の大きな目標になりました。（いつかその香りを嗅いで分析してやると少々歪んだものではありませんが・・・）目標が達成できたら是非種生物シンポの場で発表させ

ていただきたいと思います。また、これまでの様々なシンポジウムとひと味違い、一つのテーマに対して植物から菌類、さらに昆虫や脊椎動物、さらには移入種に至るまで様々な研究者の方々が集まった今回のシンポジウムでは、純粋に「生物」に対する興味をかき立てられたと同時に、これからの「研究に対するアプローチ」を考えさせられるものになりました。また発表者の方々の活気には圧倒されるものがあり、負けていけないという気持ちが沸々と湧いてきました。

今後も、種生物学シンポを、互いが刺激し合えるような活気ある場にしていきたいと思います。時間を気にすることなく、夜が更けても（お酒を飲みながら）議論ができるのは、種生物学シンポの最大かつ、最良の特徴です。学部生の方々も躊躇なく参加されることを強く勧めます。

※昔から「感想文」というものは上手く書けたためしがありません。単純に「めっちゃ楽しかった！！はいつてよかった種生物！！」と表現するのが一番かもしれません。

第1回種生物学会ポスター賞の決定

2006年12月2日の総会において学会賞の新設が議決されました（詳細については13ページの会則をご覧ください）。会則に従い、第1回の種生物学会ポスター賞受賞者の選考と決定が行われ、12月3日に授賞式が行われました。受賞者は以下の3名（受賞対象は筆頭発表者のみ）です。受賞者の方々にはシンポジウムの体験記をご執筆頂きました。会員の皆様方には、ますます魅力的になった種生物学シンポジウムのポスター発表に今後もふるってご参加いただきますようお願い申し上げます（前庶務 藤井伸二）。

安元暁子（九大・理） キスゲとハマカンゾウ間における花粉と花柱の相互作用ー生殖隔離研究の観点からー

土松隆志（東大・広域システム） ツユクサ属植物における性配分変異は種子発芽動態の違いによるのか？：理論と実証

岡本朋子（京大院・人環） 花の香りが支える種特異性ーカンコノキ属と *Epicephala* 属絶対送粉共生系においてー

会長・副会長・地区幹事選挙の結果

選挙管理委員長 松尾和人

開票は2006年11月17日16時から農環研のNo.237室で、松尾和人・牛木 純・内野 彰ら3名の選挙管理委員によって行われました。以下に開票結果をご報告させていただきます。なお、得票数

が同数の場合は、選挙の附則3に従って当選者を決定しました。

会長（有効投票数127）

当選 可知直毅 117

次点 角野康郎 2
堀 良通 2
副会長 (有効投票数 128)
当選 角野康郎 45
次点 堀 良通 37
川窪伸光 33

地区幹事

北海道 (定員 1 名, 有効投票数 11)

当選 高田壮則 4
次点 大原 雅 2

東北 (定員 2 名, 有効投票数 16)

当選 黒沢高秀 4
横山 潤 3
次点 陶山佳久 2
吉岡俊人 2

関東 (定員 3 名, 有効投票数 85)

当選 芝池博幸 9
綿野泰行 6
石濱史子 5
次点 松尾和人 5
村上哲明 5

※村上哲明, 石濱史子, 松尾和人の 3 氏が 5 票。
選挙の附則 3 により, 石濱氏が当選。

中部 (定員 2 名, 有効投票数 25)

当選 藤井伸二 4
増田理子 4
次点 渡邊幹男 4

※藤井伸二, 渡邊幹男, 増田理子の 3 氏が 4 票。
選挙の附則 3 により, 藤井氏と増田氏が当選。

近畿 (定員 3 名, 有効投票数 75)

当選 加藤 真 10
湯本貴和 7
田村 実 6
次点 高須英樹 5

中国・四国 (定員 2 名, 有効投票数 6)

当選 國井秀伸 2
吉野由紀夫 1
次点 米澤義彦 1
中越信和 1
山口 聡 1

※米澤義彦, 中越信和, 吉野由紀夫, 山口聡の 4 氏が 1 票。選挙の附則 3 により, 吉野氏が当選。

九州・沖縄 (定員 1 名, 有効投票数 8)

当選 西脇亜也 2
次点 矢原徹一 2
高宮正之 2

※矢原徹一, 西脇亜也, 高宮正之の 3 氏が 2 票。
選挙の附則 3 により, 西脇氏が当選。

総会の記録

2006 年 12 月 2 日 (奥琵琶湖マキノパークホテル&セミナーハウス)

■報告

1. 英文誌 Vol. 21 (1-3) を発行
Citation Index への登録 (2006 年 4 月)。
Impact Factor は 2008 年より掲載見込み。
2. 和文誌 30 号, 31, 32 号を編集
3. ニュースレター 32&33 号を発行
4. 2006 年決算報告 (12 ページを参照)
5. 監査報告
6. 選挙結果の報告 (前出 8 ページを参照)
7. 雑誌・著作権関連
 - ・ PSB の Copywrite Share について
Blackwell 社からの提案は見送る
 - ・ 国立情報学研究所電子図書館への参加
種生物学研究 21 号以前と PSB13 巻以前の
各巻号は CiNii サービスにコンテンツ提供

(有料) を行う。なお, PSB14 巻以降は
Blackwell 社からのオンラインサービスを
行っている。種生物学研究 22 号以降は文
一総合出版社から単行本形式で発刊。

■議題

1. 来年度事業
 - ・ 英文誌 Vol. 22 (1-3) の発行
 - ・ 和文誌 (30 号) の発行
 - ・ ニュースレター 33&34 の発行
 - ・ シンポジウムの開催 (神戸方面を予定)
2. 2007 年予算案 (12 ページを参照)
3. 2007 年役員 (前出 2 ページを参照)
4. 学会賞の新設 (13 ページ新会則を参照)
5. 会則の改正 (13 ページを参照)

2006 年庶務報告

ニュースレターの編集・発行，将来計画委員会の開催，新年度役員の選挙，電子図書館サービスへの参画，分類学会連合総会への出席，自然史学会連合講演会への出展等を行った。

3年間の任期を無事に終えることができました。これもひとえに会員の皆様に支えて頂いたおかげです。ありがとうございました。なお，新事務局の連絡先については2ページをご参照下さい。

庶務日誌

- 5月 ニュースレター32号発行，国立情報研の電子図書館事業（NII-ELS）における著作権料支払い通知，著作権協会の複写使用料調査への回答
- 6月9日 将来計画委員会（於 東大駒場キャンパス）
- 6月末 国立情報研の電子図書館事業（NII-ELS）における「抄録情報一般公開」への回答，日本学術会議「科学者倫理への取り組みについて」のアンケート回答，藤井が自然史学会連合ホームページ担当役員に
- 9月 国立情報研の電子図書館事業（NII-ELS）の統計利用状況閲覧のための学会担当者 ID 通知
- 10月 ニュースレター33号の発行，役員選挙の告示，国立情報研の電子図書館事業（NII-ELS）の新年度契約条件の確認
- 11月7日 役員選挙投票締切

11月17日 開票

11月20日 自然史学会連合講演会（於 神奈川 生命の星・地球博）にて和文誌販売，自然史学会連合役員会出席（於 同上）

12月1日 幹事会（於 奥琵琶湖マキノパーク ホテル&セミナーハウス）

（前庶務 藤井伸二）

2005 年会計報告

約3年間の会計の職務も無事終了しました。期中はみなさまにはお世話になりました。会計は西谷里美（日本医科大学）に代わりました。

現在，本学会の運営状態は会員各位の協力により，黒字運営で行われています。今後も会費の納入を前年末までに行われるようよろしくお願い致します。会計変更に伴い，会費の納入先口座が変更になりました。お間違いの無いようよろしくお願い致します。

2007年の会費は一般会員 12,000円，学生会員 6,000円です。未納金のある会員の方は，お急ぎお振り込みいただきますようお願い申し上げます。

最後に，2006年の会計監査は2007年1月18日，大阪学院大学にて林一彦（大阪学院大学）・岡崎純子（大阪教育大学）の2名にお願いし行いました。

なお，新しい会計住所と連絡先および会費振込先については2ページをご参照下さい。

（前会計 渡邊幹男）

英文誌編集委員会報告

英文誌編集委員長 原 登志彦

Plant Species Biology の2006年1月から12月までの編集状況を報告します。この間の受理論文総数は38編でした。内訳は，日本から17編，アメリカから4編，インドから3編，ブラジルから2編，ドイツから2編，中国から2編，フランス，イギリス，デンマーク，ロシア，オーストラリア，ポーランド，トルコ，メキシコから各1編でした。以上の受理論文のうち8編が却下，10編が印刷（2006年 vol. 21, no. 2, no. 3; 2007年 vol. 22, no. 1）され，20編が審査中です。2006年の vol. 21 は3号（4月号，8月号，12月号）

すべて予定通り発行され，すでに皆様のお手元にお届けしました。vol. 21では，Original Article が15編，Notes and Comments が2編，Life History Monographs of Japanese Plants が3編，そして *Plant Species Biology* の編集部が中心となって企画した種生物国際シンポジウム「植物の繁殖様式の多様性：生態，進化そして環境保全 Diversity of Reproductive Systems in Plants: Ecology, Evolution and Conservation」(2003年10月16日（木）～17日（金），札幌コンベンションセンター) の招待講演から Invited Article が2編掲

載されました（この企画はこれで終了です）。以上、合計 22 編が 2006 年の vol. 21 に掲載されたこととなります。そのうち 11 編が日本から、11 編が海外からの投稿論文でした。2007 年の vol. 22, no. 1 (4 月号) は、予定通りすでに皆様のお手元に届いたことと思います。また昨年の 3 月に提出した Citation Index への登録申請がその後すぐ 4 月には無事承認されました。Impact Factor の値は、2008 年から掲載されますが、Citation Index への登録の効果か、2007 年 1 月～2 月の 2 ヶ月ですでに 17 編の投稿があり、昨年のペースを 2 倍以上上回っています。今後も *Plant Species Biology* をよりよく発展させるため編集部は最大限の努力をいたしますが、多くの会員の皆様からの投稿も必要不可欠ですので、よろしくお願いたします。

さて、原登志彦は 1986 年の創刊号から編集委

員、編集幹事、そして 2001 年 1 月からは編集委員長を務めてまいりましたが、2007 年 3 月をもってその任期を終えることになりました（3 月末までに投稿されてきた論文に関しては、引き続き原が担当します）。この間、皆様のご協力に対し心より感謝申し上げます。2007 年の vol. 22, no. 2 (8 月号) からは、これまで編集幹事を務めてきた大原雅が編集委員長を務めます。それに伴い、この 4 月からは編集幹事の人数を 3 名から 5 名に増員するなど編集体制を拡大しますので、引き続き多くの皆様からのご投稿をよろしくお願い申し上げます。

Plant Species Biology 編集委員長

原 登志彦 (2007 年 3 月 31 日まで)

大原 雅 (2007 年 4 月 1 日より)

電子メール ohara@ees.hokudai.ac.jp

電話 011-706-4525

和文誌編集委員会報告

和文誌編集委員長 西脇亜也

1. 和文誌編集の現状

種生物学研究 第 30 号「農業と雑草の生態学」が 2006 年 3 月に出版されます。責任編集者の浅井さん、芝池さんら関係各位による労作です。また既刊である 6 冊の種生物学シリーズの販売状況も好調です。さらに宣伝したいと思いますので会員の方々はお近くの本屋さん（生協など）に種生物学シリーズの本を置いていただくようお願いしていただくと幸いです。

また、第 31 号「共進化の生態学（仮）」は 2007 年度中に出版予定で、東北大の横山さんらの責任編集で編集が進められています。また、第 32 号「種子発芽の生態学（仮）」は 2008 年始めに出版予定で、吉岡さん、清和さんの責任編集で編集が進められています。

2. 次期（2007.1.1～2009.12.31）の編集委員について

2006 年 12 月の種生物学シンポジウムで開催された和文誌編集委員会で次期の編集体制について議論されました。その結果、和文誌編集委員長は神戸大の工藤洋さん、副編集委員長は人間環境大の藤井伸二さんに決定しました。そして、今後は 1 号毎に担当編集委員を置いて円滑な編集・出版を目指すことになりました。

西脇の和文誌編集委員長の任期は 2006 年 12 月で終了となりました。慢性化している和文誌の出版遅延を改善させることができず反省しております。今後も新編集委員長である工藤洋さんを中心とした和文誌編集に加わりますが、一応の区切りとなり大変うれしく思います。今後とも和文誌出版をよろしくお願いいたします。

和文誌単行本の会員向け割引販売（約 2 割引）

<http://sssb.ac.affrc.go.jp/NewFiles/waribiki.html>

にアクセスして申し込んでください。

22 号 花生態学の最前線

23 号 森の分子生物学

24/25 号 保全と復元の生物学

26/27 号 光と水と植物のかたち

28 号 草木を見つめる科学

29 号 森林の生態学

種生物学会 会則

1. (名称)

本会は種生物学会 (The Society for the Study of Species Biology) という。

2. (目的)

本会は植物の種生物学・進化生物学研究の発展・向上を図ることを目的とする。

3. (会員)

本会の趣旨に賛同し、会費を納入した者は会員となる。本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の3種類とする。

4. (事業)

本会は以下の事業を行なう。

- 1) 種生物学シンポジウムの開催。
- 2) 学会誌 (英文誌・和文誌) およびそのほかの定期・不定期出版物の刊行。
- 3) 本会の目的達成に必要なその他の事業。

5. (財政)

会費・事業収入・寄付金をもって会の運営にあたる。

6. (総会)

- 1) 本会の議決機関は総会である。総会は年1回開催する。
- 2) 総会の議決は出席会員の過半数以上の賛成をもって行なう。
- 3) 臨時総会は、会長が必要と認めるときあるいは会員の1/3以上からの請求があったときに開催する。

7. (会長)

- 1) 会長は本会を代表し会務を統べる。会長は別に定める附則に従った選挙によって選ぶ。会長の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。再選はこれを認めない。
- 2) 会長は必要に応じて特定の事項を審議する委員会を設けることができる。
- 3) 会長は必要に応じて特定の事項を担当する委員を委嘱することができる。

8. (副会長)

会長を補佐し、会務を円滑に進めるために副会長1名をおく。副会長は別に定める附則に従った選挙によって選ぶ。任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。副会長は次期会長の候補者とする。

9. (幹事会)

- 1) 幹事会は会長・副会長・庶務・会計・編集委員長と14名の幹事で構成され、会の運営を行なう。庶務と会計については10.によって定める。幹事は別に定める附則に従った選挙によって選ぶ。幹事の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。連続3選を認めない。
- 2) 幹事会は以下の事項を総会に提案・報告し、議決ま

たは承認を得る。

- a) 会の予算提案および決算報告
 - b) 会の事業提案および報告
 - c) 会則の改正提案
 - d) その他本会の目的や事業および運営に関係すること
- 3) 種生物学シンポジウムの開催にあたって、幹事会はその運営委員を委嘱する。
 - 4) 幹事会は、会長の諮問に応じて会務の重要事項を審議する。
 - 5) 幹事会は、会長が必要と認めるときまたは幹事の3分の1以上からの請求があったときに開催する。

10. (庶務・会計)

- 1) 会長は庶務と会計各1名を委嘱し、総会に報告する。その任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。
- 2) 庶務は本会の庶務業務とニュースレターの編集発行を担当し、会計は本会の会計業務と会員名簿の管理を担当する。
- 3) 本会の会計年度および事業年度は1月1日にはじまり12月31日に終わる。

11. (編集委員会)

- 1) 英文誌と和文誌の各編集委員会をおく。
- 2) 各編集委員会は編集委員で構成する。編集委員会は編集委員長を互選する。
- 3) 編集委員は前任の編集委員の協議によって選出し会長が委嘱する。編集委員の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。重任はこれを妨げない。

12. (会計監査)

- 1) 本会は2名の会計監査委員をおく。会計監査委員の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。但し重任を妨げない。
- 2) 幹事会は会計監査委員候補を選出し総会に提案することができる。会計監査委員の選出は総会出席会員の過半数の承認をもって行なう。
- 3) 会計監査委員は本会の財産管理と会計業務を監査し、総会に報告する。

13. 会員の除名

会員が次のいずれかに該当するときは、会長は幹事会の承認を経てその会員を除名することができる。

- 1) 会費の滞納
- 2) 会の目的に反する行為や会の名誉を傷つける行為があった場合

14. (学会賞)

種生物学の発展・振興へのすぐれた業績にたいして賞を贈る。賞の種類と選考方法については細則において定める。

附則

会員の会費は前納とする。会費年額は総会で議決する。

選挙に関する附則

幹事公選制の導入に際し、以下の附則を定める。

1) 選挙管理委員会

選挙は幹事会が選出した選挙管理委員会（3名）のもとで行なわれる。開票は選挙管理委員会が委嘱した立ち会い人のもとで行なう。また会員は開票に立ち会うことができる。

2) 会長・副会長選挙

会長・副会長は会員の投票による選挙で選ばれる。選挙では全会員が会長・副会長の被選挙権を有する。また、幹事会は会長・副会長候補として、4名以内の会員を推薦することができる。投票は単記無記名とする。得票が同数の場合は年少者を優先する。

3) 幹事選挙

幹事は当該地域の会員の投票による選挙によって選ばれる。選挙は以下の地域別に割り当てられた定員数にしたがい、定員1名区では単記無記名、複数名区では地区定員数の連記無記名によって行う。得票が同数の場合は年少者を優先する。地区定員は、北海道1 東北2 関東3 中部2 近畿3 中国四国2 九州1（計14名）とする。

4) その他

幹事会は選挙の円滑な実施につとめる。

学会賞に関する細則

細則1 学会賞は「種生物学会片岡奨励賞」、「Plant Species Biology 論文賞」、「種生物学会ポスター賞」の3つからなるものとする。受賞者数は各賞ともに若干名とし、毎年選考を行う。

細則2 「種生物学会片岡奨励賞」については、自薦または他薦により推薦された学会員の中から学会賞選考委員会によって選ばれたものに授与する。推薦者（自薦を含む）は、委員会の求めに応じて選考に必要な資料を提出する。「Plant Species Biology 論文賞」については英文誌の論文公表学会員の中から、「種生物学会ポスター賞」は自薦のポスター発表学会員の中から、それぞれの選考委員会によって選ばれたものに授与する。

細則3 各学会賞の選考委員会

1) 種生物学会賞選考委員会は、会長が委嘱する委員長および若干名の委員によって構成し、「種生物学会片

岡奨励賞」の受賞者の選考と決定を行う。委員の任期は3年とする。

2) Plant Species Biology 論文賞選考委員会は、英文誌編集委員長が委員長を務め、会長が委嘱する若干の委員とともに委員会を構成し、「Plant Species Biology 論文賞」の選考と決定を行う。委員の任期は3年とする。

3) 種生物学会ポスター賞選考委員会は、会長が委嘱する委員長および若干名の委員によって構成し、「種生物学会ポスター賞」の選考と決定を行う。委員の任期は1年とする。

4) 各選考委員会は選考結果を会長に報告する。

細則4 選考規定

1) 種生物学会片岡奨励賞は、受賞年の12月1日において満40歳以下で、種生物学分野において優れた研究業績をあげた将来有望なものに授与する。

2) Plant Species Biology 論文賞は、英文誌において優れた研究成果を発表したものに授与する。

3) 種生物学会ポスター賞は、種生物学シンポジウムにおいて優れたポスター発表をした筆頭発表者に授与する。

細則5 各賞の受賞者には賞状を授与する。種生物学会片岡奨励賞は副賞として1件につき20万円を授与する。Plant Species Biology 論文賞は副賞として記念品を授与する。副賞の原資は片岡基金とする。種生物学会ポスター賞には副賞を設けない。

細則6 本細則を変更する場合は、幹事会の承認を得なければならない。

附則 本細則は2006年12月2日より実施する。

1987年2月8日 研究会から学会への組織変更のための会則改正

1989年2月11日 幹事・庶務・会計・編集委員に関する改正

1992年1月25日 幹事選挙制導入のための附則追加・改正

2004年12月11日 臨時総会・会員の除名に関する追加およびその他の改正

2005年12月17日 役員任期、事業年度、会長の職務およびその他に関する追加および改正

2006年12月2日 学会賞の設置に関する会則と細則の追加

Invited Article

Consequences of hydrochory in *Hibiscus*

(フヨウ属における種子の水散布がもたらす効果)

Kudoh, H., Shimamura, R., Takayama, K. and Whigham, D. F.

種子散布は植物集団の初期の個体分布の鋳型を決定し、その後の植物の生活環を通じた個体群動態過程はその鋳型の上で営まれる。さらに重要なことに、種子散布は植物集団内の遺伝変異の空間分布を決定する。この論文では、様々な時空間スケ

ールで、種子の水散布がもたらし得る生態的・進化的な効果に着目して、アオイ科フヨウ属における種子の水散布に関する最近の研究をレビューした。特に遺伝的変異の分布や動態が決定される上で、種子散布が関与する過程について考察した。それは、集団内の遺伝構成を変化させる埋土種子の空間的混合効果、メタ個体群内での遺伝的変異の保存場所の形成、植物の系統にパターンを生じさせる可能性がある系譜分散と種分化についてである。生態学的な時間や空間内での種子散布のパターンが、さらに長い期間にわたる進化や系統にランダムでないパターンをもたらさそうである。

Original Articles

Genetic variation in *Fagus multinervis* Nakai (Fagaceae), a beech species endemic to Ullung Island, South Korea

(韓国ウツリヨウ島固有種タケシマブナの遺伝的変異性)

Ohkawa, T., Kitamura, K., Takasu, H. and Kawano, S.

韓国ウツリヨウ島の固有種であるタケシマブナ (*Fagus multinervis* Nakai) の遺伝的変異性をアイソザイム分析によって調べた。5集団 1074 個体について分析を行い、日本に分布するブナおよびイヌブナとの比較を行った。多型遺伝子座の割合および一座あたりの対立遺伝子数は他のブナ属あるいは永年性の樹木種と同様であった。しかしながら、ヘテロ接合体率の観察値および期待値については *Fagus* 亜属の種より、*Engleriana* 亜属であるタケシマブナとイヌブナで高かった。特に、5つの遺伝子座については萌芽更新をするタケシマブナとイヌブナでヘテロ接合体率が 1.5~3 倍であった。この高いヘテロ接合体率について本文で議論している。また、有効な集団サイズの割合は、 $N_{em}/N_{ec}=6.57$, $N_{ej}/N_{ec}=6.73$, $N_{em}/N_{ej}=0.98$ (N_{em} : タケシマブナ, N_{ej} : イヌブナ, N_{ec} : ブナ) であった。

Differences in the allocation patterns between liana and shrub *Hydrangea* species

(ツル性と自立性のアジサイ属植物間の資源分配

様式の違い)

Kaneko, Y. and Homma, K.

木本性つる植物であるツルアジサイは個体の支持を樹木に依存しているため、自立性の同属低木 (ノリウツギ, エゾアジサイ, コアジサイ) よりも非同化器官 (幹と根) の比率が小さく、同化器官や繁殖器官の比率が大きいという仮説を検証するために、アロメトリーの比較解析を行った。ツルアジサイは同属低木に比べて幹の比率が有意に大きく、根の比率が有意に小さかったが、同化器官、非同化器官、繁殖器官の比率は有意差がなかった。また、4種の C/F 比 (非同化器官重量/同化器官重量) は 9 から 12 であり、有意差はなかった。これらの結果は我々の仮説を支持しなかった。一方、ツルアジサイの全重量は最大で低木の 100 倍にも達していた。自立性の植物は個体サイズが大きくなるほど非同化器官の比率が大きくなる傾向にあるが、ツルアジサイは非同化器官の比率を低木と同等に保ったまま最大サイズを大きくすることができると考えられた。これによって、繁殖器官の重量は最大で低木の 700 倍にも達しており、このサイズアドバンテージがつる植物の進化に貢献しうると考えられた。

Range-wide genetic analysis provides evidence of natural isolation among populations of the Mongolian endemic *Potentilla ikonnikovii* Juz. (Rosaceae)

(広範囲の遺伝分析により明らかになったモンゴル固有種 *Potentilla ikonnikovii* Juz. (バラ科キ

ジムシロ属) 個体群の孤立化)

Wesche, K. Hensen, I. and Undrakh, R.

隔離された集団は遺伝子流動の減少により遺伝的多様性が減少することが想定される。従って、生育地の分断化の影響は保全遺伝学においても重要な問題と考えられる。本研究では、中央アジアに分布し、分断された集団を形成する希少種 *Potentilla ikonnikovii* の遺伝的多様性を調査した。サンプリングは南モンゴルの全分布域を網羅して行った。RAPD DNA分析では、個体群ならびに種レベルの両方において中間的なレベルを示した。また、 Φ_{ST} 値 (0.68) は、隔離が集団の遺伝構造に大きく影響を及ぼしていること、変異の多くは個体群内より、個体群間で維持されていること、さらに2つの大きく隔たる集団は遺伝的に異なることなどを示した。Mantel test の結果は、遺伝的距離は空間的距離と強く相関していることを示した ($R_M > 0.6$)。以上のことより、*Potentilla ikonnikovii* 個体群は遺伝的に著しく孤立しており、このことが適応度を低下させる可能性がある。

Is early flowering in myrmecophilous plants an adaptation for ant dispersal?

(アリ散布型植物に見られる早期開花はアリ散布への適応か?)

Gutián, J. and Garrido, J.G.

エライオソームを持つアリ散布型の種子を持つ植物群でみられる早期開花が、アリ散布への適応の結果であるかを検証するため、スペイン西部のブナ林において林床草本植物の開花・結実パターンを調査した。またアリの出現頻度やアリにとっての他の食糧資源の季節変化、さらにアリによる種子の移動率も調査した。その結果以下のことが明らかになった。(1) アリ散布型植物の開花のピークは、アリ散布型でない植物よりも4週間早い。(2) 両種群の結実のピークは7月初旬で、ほぼ一致している。(3) アリの出現頻度のピークは利用できる種子量のピークと一致している。(4) *Formica rufibarbis* (この調査地における唯一のアリ種) による種子移動率は季節的に変動したが、7月初旬が最も高かった。結論として、この地域に生育するアリ散布型種子を持つ植物は開花時期を同調させており、その開花フェノロジーを種子散布者の季節変化に適応させてきた可能性が示唆された。

Synchronization between temporal variation in heat generation, floral scents and pollinator arrival in the beetle-pollinated tropical

Araceae, *Homalomena propinqua*

(甲虫送粉種 *Homalomena propinqua* (サトイモ科) にみられる肉穂花序の発熱、送粉者の訪花、花香量の増加の時間帯の一致)

Kumano, Y. and Yamaoka, R.

サトイモ科を含む甲虫送粉種の花の多くは一時的に花序が発熱するが、その発熱の生態的な役割は種によって様々報告されている。サトイモ科 *Homalomena propinqua* はボルネオ島の低地フタバガキ林の林床に生息する一般的な草本で、2種の甲虫 *Parastasia bimaculata* Guerin (Scarabaeidae) と *Dercetina sp.* (Chrysomelidae) が訪花し花粉を運ぶ。本研究では、甲虫送粉者の誘引に対する *H. propinqua* 肉穂花序の発熱の役割を明らかにするため、送粉者の訪花時間の調査、肉穂花序の表面温度測定、花香の化学分析、肉穂花序と仏炎苞に対する送粉者の行動実験を行った。その結果、*H. propinqua* 肉穂花序は、開花1日目、2日目において6:30から9:30まで発熱しており、その時間帯は甲虫送粉者の訪花時間帯と一致していた。次に肉穂花序と仏炎苞に対する送粉者の誘引実験を行った結果、両種とも肉穂花序に有意に誘引された。さらに化学分析の結果、*H. propinqua* の花香成分として18成分が検出でき、そのうち最も揮発性の高い2-butanolが花香の約50%を占めることがわかった。これら花香の量変動を調べたところ、開花1日目の7:00から8:00に花香量が一時的に増加しており、肉穂花序の発熱、送粉者の訪花、花香量の増加の時間帯が一致することが示された。これらのことから、送粉者を誘引する部位である肉穂花序が発熱することにより、花香(特に2-butanolのような揮発力の高い成分)の揮発が一時的に促進され、その結果甲虫送粉者が一時的に誘引された可能性が示唆された。

Population biology of *Pogonia japonica* in Russia and Japan

(ロシアと日本におけるトキソウの個体群生物学)

Tatarenko, I.V. and Kondo, K.

ラン科トキソウは、根茎基部から多年生の長い

根を出し、所々で不定シュートをだして増殖するクローン植物である。種子は、3年以上稔性を維持し、まれに発芽するため、個体群は多様な年齢構成となった。各ラミートは垂直方向で単軸的に伸びた部分シュートであり、次いで最初の花を咲かせた後に仮軸生長に変わった。各年のシュート生長は節間2個で、個体年齢が推察できた。1本の根が3-12個のラミートをだし、迅速な生長を補足しあうと考えられた。適した生育場所の旺盛なラミートは2, 3年後最初の花期をもち、続いて3, 4年間花期をもった後、1, 2年で老衰した。これに対し、不適当な生育場所のラミートは3-5年かけて最初の花期をむかえた直後かそれ以前に枯死した。2-4年経過のシュートの分離は、通常の栄養繁殖法であった。成熟個体は分離後1, 2年間休眠状態となることもあった。ロシアの個体群では栄養体成熟個体が優占し、日本の個体群では多数の若いラミートがみられた。着花頻度は平均15%であったが、55%が日本の1個体群でみられた。最高着果頻度80%がロシア個体群でみられた。植物体のサイズと個体群構造の違いは地理的違いよりも生態的違いを反映していた。

Andromonoecious sex expression of flowers and pollinia delivery by insects in a Japanese milkweed *Metaplexis japonica* (Asclepiadaceae), with special reference to its floral morphology

(ガガイモ(ガガイモ科)の花の性表現(雄花両性

花同株)と昆虫による花粉塊授受および花の形態との関係)

Tanaka, H., Hatano, T., Kaneko, N., Kawachino, S., Kitamura, O., Suzuki, Y. Tada, T. and Yaoi, Y.

日本中部でガガイモの花生態学的研究をした。形態的観察と受粉実験により、これまでガガイモ科では知られていなかった雄花が39%存在し、ガガイモは雄花両性花同株であることを明らかにした。雌蕊の頂端に花柱のように見える特異な長い突出部を持つが、この突出部には花粉塊は付着せず、人為的に付着させても花粉は発芽しなかった。柱頭は、他のガガイモ科の花と同様に、蕊柱の内部にある5個の花粉室に面した、花柱の側面にあることを実験により確認した。花粉塊は10個あり、褐色のクリップに細い柄で2個ずつ接続している。蜜を求めて訪れる昆虫の口吻や脚に生えた微毛がクリップに触れると、それを捕捉し花粉塊が葯から外れる。昆虫に付着した花粉塊は、両性花の蕊柱にある5個の隙間のいずれかに差し込まれると、クリップからはずれ花粉室に入り受粉する。チョウ・ガ・ハナバチ・アリ・ハエ・甲虫など様々な昆虫が花を訪れたが、花粉塊は頻繁に訪れるオオハラナガツチバチとヒメハラナガツチバチによって運ばれることが多く、この2種が最も送粉に貢献していた。花粉/胚珠比は21, 全花の結果率は6.5%あり、共に他のガガイモ科の数値より高かった。

その他

Life-history monographs of Japanese plants

(日本の植物生活史モノグラフ)

シリーズ7:ウバユリ (*Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino (Liliaceae))

すきま CM (他学会等の大会日程)

■21th Pacific Science Congress

6月12-18日

(沖縄コンベンションセンター, 宜野湾市)

詳しくは、<http://www.psc21.net/> をご覧下さい。

・植物地理・分類学会 5月26-27日 (金沢大)

・日本植物学会 9月7日-9日 (東京理大)

・日本植生史学会 11月17-18日 (大阪自然史博)

2006 年度自然史学会連合総会議事録

日時：2006 年 12 月 9 日（土）13：30-15：30

会場：国立科学博物館自然史研修館 4 階講堂

出席学会（出席者）：日本遺伝学会（館野義男）、日本花粉学会（池田重人）、日本貝類学会（佐々木猛智）、日本魚類学会（茂木正人）、日本菌学会（出川洋介）、日本古生物学会（甲能直樹）、日本昆虫学会（清水晃）、日本昆虫分類学会（友国雅章）、日本植物学会（山田敏浩）、日本植物分類学会（西田治文）、日本人類学会（海部陽介）、日本生物地理学会（向井貴彦）、日本藻類学会（野崎久義）、日本第四紀学会（斎藤文紀）、日本地質学会（齋木健一）、日本地理学会（手塚章）、日本蜘蛛学会（小野展嗣）、日本動物行動学会（上田恵介）、日本動物分類学会（高桑正敏）、日本霊長類学会（山越言）、日本哺乳類学会（高槻成紀）、日本地衣学会（原田浩）。

委任状：種生物学会、植生学会、地衣類研究会、東京地学協会、日本プランクトン学会、日本ベントス学会、日本衛生動物学会、日本生態学会、日本動物学会、日本鱗翅学会、日本蘚苔類学会。

運営委員会：篠原現人、野村周平

代表挨拶：西田代表より挨拶があった。

議長選出：出席学会の中から、議長の推薦を募ったが、なかったため、運営委員会より、高桑正敏氏（日本動物分類学会）を推薦、承認された。
・総会成立の確認 出席 2 2、委任状 1 1、計 3 3 学協会で定足数（37 団体の 3 分の 2）に達したので成立。

1. 報告事項（括弧内は報告者）

1) 講演会の開催（野村）：11 月 12 日（日曜日）11：00～16：30 に、神奈川県立生命の星・地球博物館において講演会を実施した。なるべく広い分野をカバーできるように、昨年同様、10 名の演者に各 20 分ずつ話をしてもらった（配布資料参照）。参加者数は約 110 名。一昨年まで科博で行っていたシンポジウムの形式を脱して、昨年からの地域の博物館などで行う講演会の形に改めたが、一般の参加者も多く、連合の認知という意味では非常に効果が上がっているという手ごたえを感じている。若干の問題点として、1) 遠くから時間をかけてきて話をしてもらうには話す時間が物足りないという演者側の意見があった、2) ポスター展示に参加する加盟学協会が少ないので、もっと積極的に参加し

てほしい、統一フォーマットを検討中、3) 次回は早めに会場側の広報とコンタクトを取って広報活動を行うべき、などの点が挙げられた。

2) シンポジウムの共催など（野村）：学術会議の中に設けられた「学術・芸術資料保全体制検討委員会」委員である馬渡駿輔氏からの依頼で、学術会議の公開講演会「博物館が危ない! 美術館が危ない! —指定管理者制度・公共サービス改革法の落とし穴—」の後援者として名を連ねた。

3) 博物館部会（齋木・西田）：今年度前半は十分な活動ができなかったが、年度末までに部会の会合を開催して体制を整え、活動方針を検討したい。博物館活動に深くかかわっている加盟学協会会員からの意見を吸い上げ、学術会議などにおける議論に反映できる活動を目指す。また今回、兵庫県立人と自然の博物館基本構想に対するパブリックコメントの募集があったので、西田が連合代表名でのコメントを送った（配布資料参照）。

＜質問＞連合の中に学術会議の連係会員は誰がいるのか？リストができるとよいのではないか？

＜回答＞連係会員のリストはあるので、リスト作成の方向で検討する。

4) ホームページ（篠原）：ホームページの維持運営については、月 2 万円の経費を使って業者に委託しており、この経費が高すぎるとの批判もあるが、一般と比較すると格安であることは明らかであり、よりよく利用することを心がけるべきであると考えている。広く一般向けの記事よりもまず加盟学協会に必要な記事の充実を図りたい。

＜質問＞加盟学協会からのリンクは？

＜回答＞連合 HP からすべての各加盟学協会 HP へリンクしている。各加盟学協会 HP からは、リンク集がある場合にはほとんどがリンクしていると承知している。

5) 大学における学会会場費値上げ問題（西田）：以前に行ったアンケート調査の結果→配布資料。データが必ずしも十分でなかったことと、意見書を出すタイミングを逸してしまったことから、次回をにらんで情報収集。

6) その他（野村）：自然史学会連合は日本学術会議第 20 期の協力学術研究団体として登録さ

れた。学会連合体としては現在唯一の登録団体である。

2. 審議事項

1. 2005年度会計決算の報告（山田）：支出項目名「シンポジウム開催費」を「講演会開催費」に訂正した。

2. 監査報告、承認（野崎、池田）：野崎、池田両監査役員出席により、決算が適切に処理されていることが報告され、承認された。

3. 2006年度会計経過報告（山田）：2005年度決算と同じく支出項目名を訂正。

4. 2007年度予算案の承認（野村、篠原、山田）：予算案を審議するに当たって、来年度の活動方針案が示された。従来のシンポジウムの後継である講演会の開催を活動の一つの柱として力を注ぎたい。さらにこのところ活動が停滞気味であった博物館部会の新体制作りを急ぎ、具体的な活動方針を確立していきたい。ホームページについては前述のような方針で、整備を進めていきたい。これまで予算項目の中にあつた「自然史教育展開プログラム」と「自然史研究機関立案アクションプラン」はここ数年、支出ゼロが続き、実態がなくなっているため、項目を削除し、予算は予備費に回して、より融通の利く態勢としたい。

<質問>ホームページについて、加盟学協会員のためのホームページ作りというのは意味があるのか？事務局からのメールの配信で十分ではないのか？

<回答>加盟学協会員だけのためのものではなく、エッセイ、ギャラリーなどの一般向けコンテンツも維持していく。具体的にどのような改革を行うのか、運営委員会に持ち帰って検討する。

この後予算案が示され、2005年度決算と同じく、項目名を訂正した後、承認された。

5. 2006～2007年度運営委員、役員（西田）：昨年の総会で承認された運営委員（森田・上田・野村・篠原・海部・出川・山田）のうち、森田氏はどうしても運営委員としての時間が取れなくなってしまったため、齋木氏と交代した。しかし、齋木氏が地質学会の連合担当として認定されるために時間がかかり、つい先ごろの交代となった。代表指名の運営委員として、藤井氏を任命した。以上、報告の上、承認された。

6. 連合運営規則の改定（野村）：学術会議の体制変更のため、連合運営規則第3条の文言に訂正が必要になった（配布資料参照）。また、新規加盟を希望する団体が、総会での承認までの間長期待たされるのを避けるため、「連合の総会で審議する」という文言を変更したい。

→出席者からの指摘により、第3条を以下のように変更することがあらためて提案され、出席学協会全員の挙手をもって承認された。

「3. 連合への加盟と連合からの脱退は各学協会の自由意思による。ただし、学術会議協力学術研究団体以外の加盟希望についてはその適否を運営委員会で審議し、その結果について加盟学協会の2/3以上の賛成をもって承認する。」

7. 新規加盟学会の承認：6月に新規加盟の希望のあつた日本地衣学会の加盟が承認された。当学会は申請の時点にさかのぼって加盟と認める。ただし、分担金は翌年度から。

8. 来年度講演会の予定（野村）：滋賀県立琵琶湖博物館で開催することについて内諾をもらっている。時期は今年度と同じ頃（科研費の申請は11月25日）としている。再来年度以降については、もし加盟学協会員から開催場所の提案があれば検討したいので、積極的に申し出ていただきたい。

9. その他：日本生物地理学会 向井貴彦氏から出席者へのお願い。岐阜県では周囲に自然史系の博物館がほとんどなく、多数の愛好家にとって情報交換や教育普及の場所がなく、大変不自由している。地域の声を集め、博物館設立の要望を出すに当たって、効果的な方法や手続きなどについてご存知の方がおられたら、是非ご教示いただきたい、とのこと。

日本分類学会連合第6回総会議事録

2007年1月7日（日）15:00-17:00 国立科学博物館分館

議長選出：日本動物分類学会の西川輝昭氏を議長に選出した。

<報告事項>

(1)庶務（佐々木）：2006年の主な活動は、第5回総会の開催(1/7)、第5回シンポジウム「ミドリムシは動物？それとも植物：原生生物の不思議な世界」の開催(1/8)、日本におけるドイツ

年記念シンポジウム「日独学術交流史 ミ 相模湾動物相調査の歴史と成果」の開催(1/9)、役員会の開催(4/15 第 16 回、7/26 第 17 回)、ニュースレターの発行、バーコード・オブ・ライフ協会との協力覚書の提出(5 月)、海洋と生物 164 号の特集「日本分類学会連合と分類学の過去、現在、未来」の出版(6 月)、科研費研究成果公開促進費(データベース)の申請(11 月)である。

- (2)ニュースレター(柁原): ニュースレター9号を7月4日に、10号を12月28日に発行した。
- (3)ホームページ(山田: 佐々木代理): ホームページの更新は今後の検討課題である。
- (4)日本産生物種数調査(柁原): アンケートを行い、その結果をニュースレター10号に掲載した。
- (5)タイプ標本データベース(伊藤): データベースの作成を継続中である。科研費(データベース)を申請した。
- (6)メーリングリスト(三中): Taxa 会員数は2006年末現在で797名である。昨年より43名増加した。
- (7)国際動物命名規約日本語版(友国): 2006年は65部の注文があった。残部は約100部である。通算で約2100部を頒布したことになる。

<審議事項>

- (1)監査員の交代: 新しい監査員を日本原生動物学会の松岡達臣代表、日本ダニ学会の後藤哲雄代表に依頼する案が承認された。
- (2)2006年度決算・会計監査報告: 2006年度決算案(一般会計、特別会計)の報告があり、監査員から決算が適切に行われていることが報告された。収入は、分担金260,000円、受取利息76円、広告料50,000円、総会・シンポジウム152,000円、前年度繰越金938,315円、合計1,400,391円である。支出は、総会・シンポジウム213,644円、事務経費53,610円、特別会計へ立替100,000円、来年度繰越金1,033,137円、合計1,400,391円である。検討の結果、決算案は承認された。2006年度の分担金は5学会(日本貝類学会・日本蘚苔類学会・日本シダ学会・日本線虫学会・日本地衣学会)が未納であった。
- (3)2007年事業計画
 - a)2008年1月のシンポジウム案の検討: 「後生動物の発生と系統」を中心に開催案の検討を

進めることになった。

- b)ニュースレター: 加盟学会紹介の記事は、全ての学会分を掲載したことになり、新しい企画が必要である。案として、(1)加盟学会における最近のトピック、(2)和文誌からの再録の掲載を検討することになった。
 - c)ホームページ: コンテンツを充実させるための組織が必要であるとの指摘があり、今後委員会の立ち上げを検討することになった。ホームページの維持管理を業者への委託することは、現在の予算規模では困難である。そこで、アルバイトを依頼するなど案を検討したが、継続的に維持管理を行うには不安がある。今後、朝川前幹事に相談しながら、新しい管理体制を検討する。ニュースレター9号、10号をホームページに掲載できていないため、UJSSBメーリングリストを通じて加盟学会代表に配布し、そこから各加盟学会に配布を求めることになった。
 - d)日本産生物種数調査: 各生物群ごとに日本産の種のリストが存在するかどうか、さらに調査を行う。
 - e)タイプ標本データベース: 今後もデータベースにデータの追加を依頼する。
- (4)2007年度予算: 2007年度予算案が示され、承認された。収入は分担金310,000円、受取利息10円、特別会計より100,000円、前年度繰越金1,033,137円、合計1,443,147円である。支出は総会・シンポジウム148,000円、事務経費50,000円、ニュースレター編集費50,000円、予備費1,195,147円、合計1,443,147円である。
- (5)補助金・受託研究費等取扱規程: 規程案が示され、承認された(下記を参照)。
 - (6)その他: 連合の今後の運営方針について審議した。
 - a)共催シンポジウム: 今後2年間、生物教育学会と共催シンポジウムを開催することが決定しており、次年度の生物教育学会の大会は1月26-27日に名古屋地方で開催される。しかし、それとは別に、連合が主体となって東京でのシンポジウムを企画し、生物教育学会に参加を求めるべきである、との意見も出された。提案があれば今後受け付けることになった。
 - b)太平洋学術会議: 4月15日がシンポジウムの締切である。連合として参加する場合は、「日本の生物の多様性はどこまで分かっている

か？」などのテーマで行う案が提案された。しかし、演者の参加費・旅費の負担を含めて検討しなければならない点が問題である。今後役員会で参加の是非を決定することになった。

c)分担金：役員会の旅費、シンポジウムの講師の旅費、ホームページの維持管理に経費を十分にかけることができない状況であるため、分担金の値上げが提案された。一律2万円にする、学会の規模（会員数）によって金額を変える、などの案が検討されたが、1年間予備費の様子を見ながら審議を継続することになった。

(7)2008年総会の開催：総会は東京で2008年1月5日（土）または12日（土）に開催する。

補助金・受託研究費等取扱規程

第1条 日本分類学会連合（以下「連合」という）が主体となって行う研究・事業のうち、外部団体・組織等からの補助金・受託研究費等によるものの会計については、この規程の定めるところによる。

第2条 前条の補助金・受託研究費等は連合の一

般および特別会計とは別個に管理・執行する。

第3条 本会計は、連合規約第7条に定める幹事のうち会計を担当するものが管理する。ただし、必要があれば連合代表は他の責任者を指名することができる。

第4条 本会計の管理者は本会計の管理・執行状況を半年ごとに連合代表に報告しなければならない。

第5条 本会計の会計監査は、連合規約第7条に定める監査員が担当する。会計監査は、連合の会計年度末および当該研究・事業の終了時に行う。

第6条 第1条の補助金・受託研究費等の会計については、本規程の各条のほか、当該補助金・受託研究費等に関わる規定に従わなければならない。

■日本分類学会連合ニュースレターの入手方法

電子媒体による発行なので、下記URLからダウンロードを行ってください。

<http://www.bunrui.info/NL/index.html>

会費納入のお願い

種生物学会の年会費は前納制です。2007年度の会費は一般会員12,000円、学生会員6,000円です。まだ納入されていない方は、お急ぎお振り込みいただきますようお願い申し上げます。

会費納付先 郵便振替番号 00240-6-45544 口座名義 種生物学会

※1月より口座番号が上記のように変更されました。以前の振込用紙は使えませんのでご注意ください。

会員異動

[Redacted membership change information]

[Redacted membership change information]

種生物学会ニュースレター 34

発行 種生物学会

URL <http://sssb.ac.affrc.go.jp/>

編集 藤井伸二（前庶務，人間環境大学）

発行日 May 2007

印刷 イヅミ印刷所

2007年1月1日に学会事務局が移転しました。新所在地と連絡先については2ページをご参照ください。

住所変更・会費・入退会に関するお問い合わせは、会計（2ページ参照）までお願いしま

